

私たちの活動や意見を
仲間で共有します
会費は県と日本平和委
員会の活動も支えます

土浦平和の会ニュース

発行：土浦平和の会
事務局：土浦市神立町2664
ホームページ://heiwatutiura.
web.fc2.com/

「私たちが平和の尊さを伝えます」 ピースデイで中学生が力強く発言



8月2日から9日まで、県南生涯学習センターで「原爆と人間展」が開催され、期間中に延べ1711人が入場しました。また、6日に行われたピースデイには会場をいっぱいにする120人が、朗読や映画を観賞し、講演に耳を傾けました。

この日午後の催しでは、主催者でもある県原爆被害者協議会の黒川さんが「長崎は原爆投下の第2目的地であった。当初予定のときわ橋付近に落とされていればもっと被害は大きかっただろう。私の実家からわずか120mの上

空であった。原爆で母と弟を失った。二人は風速70m/秒の熱風（爆発中心部で6000度、地上で3000度）によって、おそらく苦しむ時間もなく焼き殺されたと思う。私も投下10日後に入市して被爆した。この犠牲があって生まれた今の平和をいつまでも大事にしてほしい」と訴えました。

その後、昨年の平和使節団として広島平和祈念式典等に参加した土浦市内の中学生（8校16名中5校7名）が広島で見たこと、感じたこと、考えたこと、将来の夢について語り

ました。

★今ある平和な生活は当たり前のことではない。広島での経験を語り継いでいかななくてはならないと思う。

★平和に関連した職業に就きたい。

★音楽家や音楽教師が夢だが、そういう活動を通して平和の大切さ

を訴えたい。

★薬剤師など医療関係の仕事に就いて人を助けたいと思うようになったのも広島での経験が元になっている。

★いろいろな人と関わりあえる仕事をしたい。

★使節団に参加して得られたことを糧に、人に役立つ仕事をしたい。

今年の広島・長崎平和宣言

今年の広島・長崎両市長によるそれぞれの平和宣言のキーワードを抜き出しました。

【広島平和宣言から】
★かつて人類が経験したことのない「絶対悪」
★地球そのものを破壊しかねない一万五千発を超える核兵器★テロリストによる使用も懸念★核兵器のない世界に立ち向かう情熱★各国の為政者に被爆地訪問を要請★若い世代の皆さんの力も必要★核

兵器のない世界は、日本国憲法が掲げる崇高な平和主義を体現する世界★「黒い雨降雨地域」の拡大

【長崎平和宣言から】
★人間を壊し続ける残酷な兵器★自分の目と耳と心で感じることの大切さ★事実を知ることが核兵器のない未来を考えるスタートライン★法的な議論を行う場ができたが核兵器保有国は出席していない★日本政府は、核兵器

廃絶を訴えながらも、一方では核抑止力に依存する立場★この矛盾を超える方法として、非核三原則の法制化とともに、核抑止力に頼らない安全保障の枠組みである「北東アジア

非核兵器地帯」の創設★核兵器の歴史は不信感の歴史★粘り強く信頼を生み続けること★私たち一人一人にできること。国を超えて人と交わることで、言葉や文化、考え方の違い

を理解し合い、身近に信頼を生み出すこと★当たり前と感じる日常、お母さんの優しい手、お父さんの温かいまなざし、友達との会話、好きな人の笑顔…。そのすべてを奪い去るの

が戦争★若い世代の皆さん、未来のために、過去に向き合う一歩を踏み出して★長崎は、放射能による苦しみを体験したまちとして、福島を応援し続けます★被爆体験者の救済を

戦争の悲惨さを考えることで、平和の大切さが身に沁みて分かる。とりわけ、戦場の狂気に満ちた、壮絶、かつ、悲惨な様相を語れる人は少ない。しかし、その貴重な体験を追体験することが重要である。

このことについて述べたい。

太平洋戦争の戦死者は、日本では300万人、アジアでは2千万人である。戦死者の思いは如何ばかりか。想像を絶する。戦場での戦死者は、戦争そのものの体験者である。しかし、戦死者は、戦場の体験を語るができない。残念無念の極みであろう。

戦場の体験は、往々にして武

リレー随想

勇伝として語られることが多い。とくに、アメリカ映画が顕著である。勝利した誇りでもある。意図的に美化したものも多い。戦意高揚を狙ったものもある。一方、戦場の悲惨さをリアルに描いた作品は少ない。しかも、それらの作品は、次第に消えつつある。結局、戦場の体験に接する機会が少なくなっている。したがって、それを考える機会も少なくなっている。

日本の場合、戦場の悲惨な体験を語れる人は極めて少ない。負け戦であったこともある。なによりも、兵士は、ほとんど戦死してしまったからである。なぜなら、降伏を許さず、玉砕を強要されたからである。230万人の兵士が戦死した。想像を絶する数である。230万人の悲惨な戦争体験がある。しかし、戦死した兵士は、その体験を語るができない。

生き残った者も少なからずいる。しかし、悲惨極まる戦場の様子は、筆舌で語り尽くすこと

ができない。

戦場の体験談（体験記）として、次のようなことは、強烈な印象として、今でも記憶に残っている。

南方では、ジャングルを逃げ回り、餓死した兵士が圧倒的に多かった。インパールからの撤退は、屍累々で、白骨街道といわれた。飢えに苦しみながら、前の人の飯盒についた汁をなめながら歩いたという。海戦で海に放り出された兵士は、空からの機銃掃射やサメの餌食となってしまった。硫黄島では、洞窟に立てこもって戦ったが、アメリカの圧倒的な火力で壊滅した。沖縄戦では、洞窟のなかで火炎放射を浴びせられ焼け死んだ。いずれも言語を

絶する悲惨な体験である。生きて故郷の土を踏みたい、腹一杯食べたい、親、妻子、兄弟、恋人と語り会いたい。しかし、その願いは叶わなかった。

平和の大切さ

戦後71年、悲惨な戦場の体験談に接する機会が少なくなった。もう一度原点にもどって、戦場の悲惨さを追体験することが大切である。そのことが、平和の大切さを深く理解し、かつ、戦争を阻止する力、つまり、戦争を推進する全体主義、国粹主義、排外主義、ファシズムを阻止する力になる。

(高久 清)